

編輯顧問

倉橋惣三

と

キンダーブック

⑨

二つの草花特集にみる編集の方向性の揺らぎ

― 第三輯第一編、第六輯第一編の「草花」 ―

浜口順子

(大学教員)

昭和五年の「草花」と昭和八年の「クサバナ」

昭和八(一九三三)年四月に発行されたキンダーブックの特集は「クサバナ」。こんなに愛らしい表紙があったかしら? と目が吸い寄せられる(画像1、作者不詳)。赤、青、黄の鮮やかな原色の、可憐に軽やかに描かれた草花の向こうに、金髪で青い目の、ハトを胸に抱いた女の

かれん

子と、スコッチテリアらしきハイカラな犬が見つめ合う図だ。戦前のキンダーブックの表紙の絵は全体的に写実的で濃い画質のものが多くから、その中でこの淡いムードは異色である。そのちよūd三年前

の昭和五(一九三〇)年四月に、やはり「草花の巻」という特集が組まれている。表紙(画像2、藤澤瀧雄画)の雰囲気の違いは歴然としている。

その両方で「花の組み立て」というページがある。



▲画像1 「クサバナ」(昭和8年)表紙



▲画像2 「草花の巻」(昭和5年)表紙

浜口順子 (はまぐちじゆんこ)
お茶の水女子大学大学院教授。本誌編集主幹。



▲画像3 ハナノクミタテ(昭和5年)



▲画像4 ハナノクミタテ(昭和8年)

ほとんど同じ構図で、男児が虫眼鏡で花の「しべ」を観察している。しかし、男児の目から発する視野（らしきもの）の広がり、昭和五年版（画像3、田村昇画）ではちゃんとレンズを突き通っているが、昭和八年版（画像4、世良田勝画）のほうではレンズの向こう側を素通りしている。観察絵本として科学的観察の仕方を示すのなら、昭和五年版のほうがふさわしいと言わざるを得ない。また、男児の表情を比べると、昭和五年版は、口をわずかに開き、いかにも集中している様子であるのに対して、昭和八年版のほうは笑みを浮かべて楽しんでいる。

編集方針に動揺か

昭和五年版がリアルで正確な情報を伝えようと苦心して編集されているのに比べて、昭和八年版は草花とかわること自体の楽しさや華やかなムードを抒情的に伝える方向に傾いている。「たねまき」というページを比較してみよう（画像5、6）。双方とも、父親らしき人物を中心に花壇を囲み、子どもたちが種まきやチューリップの植え替えをしているのだが、昭和五年版では、蒔く種まの形や、チューリップの球根部がはつきりと描かれている。しかし昭

和八年版はそれらが隠れて見えない。また、昭和五年版は内容の十四ページすべて、下方5分の2ぐらいの幅をとって、草花に関する図鑑的情報が「帯」で克明な絵と文字で描写されている。一方、昭和八年版では、帯情報は十四ページ中四ページだけであり、そのほかはページ全



▲画像5 タネマキ(昭和5年)

面の草花の絵の中に植物名が書き込まれており、文字も絵も不鮮明で見づらい部分がある。

戦前のキンダーブックは、当代一流の画家や作家たちに各ページの絵や文を別々に注文するため、読者として、芸術性・文化性の高さに感銘を受ける反面、誌面全体の統一感には物足りなさを覚えざるを得ない。また、各号間においても連続性よりむしろ個性が際立つのは、当時のキンダーブックが倉橋惣三と岸邊福雄という二人の編輯顧問以下、絵画・童謡・童話・作曲の各専門顧問、そして各部門の主任らという大型チームで制作されており、特集内容によって毎号の実質的な編集責任者が交代していたからだと考えるのが自然であろう。そうではあっても、昭和七年ごろまでは、観察絵本として正確かつ多角的な情報を子ども視点に立って伝えようとする編集方針において、ほぼ一貫した流れを感じられる。昭和八年の「クサバナ」前後から編集方針に何かしらの変化が起こっていたのではないか。



▲画像6 タネマキ(昭和8年)

かわいくない？ 子ども

昭和八年版「クサバナ」の内容は、次のようになっていいる。お花畑（木曾御嶽山の池付近）／種まき／芽が出た／草花畑の手入れ／花と虫／咲いた咲いた／花壇のお花見／摘み草（野に咲く草花）／いい匂い！／菖蒲園・水草の花（図鑑・キンギョモ、フウセンソウ、ヒシなど）／珍しい草花（南アメリカアマゾンのおオオニバス）・運動する草花（図鑑・オジギソウ、カタ



▲画像8 ハナタバ(昭和8年)



▲画像7 イイ ニオイ!(昭和8年)

バミ)・虫を食べる草花(図鑑…ウツボカツラ、モウセンゴケ、イシモチソウなど)／毒のある草花(図鑑…ヒガンバナ、トリカブトなど)・薬になる草花(図鑑…サイシン、ゲンノシヨウコ、センブリなど)／花の組み立て(エンドウの花、大根の花、タンポポの花など)・草花からできる薬(図鑑…ヒマシユ、モルヒネ、ハチミツなど)・芽の出方(図鑑…ユリ、クワイ、サクラソウなど)／花束。

この中に、ちよつと不思議な描かれ方をしている子どもが登場する。「いい匂いー」という言葉が添えられているページ(画像7)は、色調が全体に暗く、そこでニオイスマレを持って匂いをかぐ女兒は、東郷青児画伯の斜め上目遣いする女性像をほうふつとし、およそ幼児の描かれ方として一般的とは言にくい。一方、画像8の女兒は、赤いほおの血色良くいかにも健康そうで、音楽発表会のご褒美だろうか、花束を抱えて少しはにかみながらも誇らしげにほほ笑んでいる。しかし、その背景に見えるグランドピアノの前の子どもは、対照的に、斜め後ろを振り返り、その雰囲気は決して明るい感じではない。ひっそりと正面の女兒を祝福しているのか……。

軍国主義化が強まる国情の中で、健全で強い子どもが求められる時代になっていった。それは、童心至上主義的な大正期の子ども観からの転換を意味する。ヨーロッパのメルヘンから来たような子どもも、大人じみたアンニュイな子どもも、画家たちが手探りで描く子ども像だったのかもしれない。

―続く―(引用は、現代文学・仮名遣い等に変えてあります。)